

**第6回企画展「NOBORITO1945 - 登戸研究所70年前の
真実-」記録 企画記念第二回講演会 第二期：8月15
日以降の登戸研究所 - 戦後の登戸研究所と所員たち**

著者	山田 朗
雑誌名	明治大学平和教育登戸研究所資料館館報
巻	2
ページ	121-139
発行年	2016-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10291/21336

第6回企画展「NOBORITO 1945 ―登戸研究所 70年前の真実―」記録

企画展記念第二回講演会 第二期：8月15日以降の登戸研究所 戦後の登戸研究所と所員たち

山田 朗

明治大学平和教育登戸研究所資料館長

はじめに

皆さん、こんにちは。登戸研究所資料館企画展記念講演会にお越しいただきましてどうもありがとうございます。従来、企画展は11月から始めて3月までの期間でやっているのですが、今年度に限りまして戦後70年ということがございますから昨年8月から企画展を始めまして、第一回の講演会を8月にやらせていただいております。それを受けて今日が第二回の講演会です。企画展の方でも第一期、第二期というふうに分れておりまして、一期は8月15日までの登戸研究所ということで1945（昭和20）年の登戸研究所は、敗戦までどんなことをやっていたのかということと第一期の企画展で展示をいたしました。そして11月から第二期ということで8月15日以降の登戸研究所はどうなったのか、もちろん陸軍登戸研究所という組織としてはなくなるわけですが、そこに勤めていた人たちにも戦後の歴史があるわけです。それから、何といたしましても8月15日以降にこの登戸研究所に関係するさまざまな証拠が隠滅されたというようなこともありますので、そのあたりを中心にこの第二期の企画展を開催しております。その内容と、さらにそこからわかってきたことを皆様にお伝えをしたいというのがこの講演会の目的です。

70年前、1945（昭和20）年の8月15日以降、何が起こったのか。一言でいえば、登戸研究所での証拠隠滅ということですが、当時の登戸研究所は大きく言うと二つに分かれていました。まず、この生田の地にある登戸研究所。これはもともとここに登戸研究所があって、昭和20年4月を期して全国に分散疎開するのです。主だったものは長野県の伊那地方に移転をします。それから研究部門は同じく長野県の安曇野に移転をするのです。伊那地方で行われた証拠隠滅について、私たちも調査をして参りましたので、ここでお伝えすることができます。それから、所員達の戦後ですね。実はこれは登戸研究所を考える上で非常に重要なところ。1946（昭和21）年1月に公職追放令というのが出て職業軍人の人たちは公職に就けなくなる。この場合の公職というのは公務員、議員ですね。それから教育関係やマスコミ関係も公職という枠内に含まれ、そういう職業に就けなくなります。そうしますと、当然自分たちが今まで身

に付けてきた技術を活かして企業を起こしたり、あるいは民間企業に勤めたり、さらには米軍に参加するという人たちが出てきます。特に登戸研究所に関係した人たちのなかでも、偽札関係とか、そういう秘密中の秘密の作戦に関わった人たちのなかには米軍に参加をして、その後の朝鮮戦争、初期のベトナム戦争の頃まで米軍の仕事をしていたという人がいらっしやるんですね。実はこの部分は本当にわかりません。といいますのは、戦前のことについて非常に詳しく本に書いているような人たちでも、戦後、米軍のなかで何をやったのかということについてはほとんど語っておられないのです。これはいろいろ語れない事情というのがあるわけですし、現在につながっている。それから米軍との関係で、やっぱり今もって話すことができないということがたくさんあるわけです。伴繁雄さんという登戸研究所ができた時からずっと関わって、第二科で班長を務めた非常に重要な人が、『陸軍登戸研究所の真実』という本を戦後お書きになりました（1993年脱稿、2001年芙蓉書房出版より刊行）。人体実験などについてもその本のなかで触れているわけですがけれども、戦後の米軍との関わりについてはほとんど触れておられない。ですから、私たちも文献で確かめるということがなかなかできないものですから、やはり関係者の方、そこに関わった方への聞き取りを中心に、こういうことが行われたのではないかということ推定せざるを得ないということですし、また証言をしてくださった方への差し障りもあるものですから、あまり具体的にお名前を出して語るということができないという部分がございますので、その点あらかじめご了承くださいと思います。しかし、現実問題としては米軍の秘密戦に協力する、協力するというか、まさに米軍の一員となってそれに参加していく人たちが出てきたということです。

【明治大学生田キャンパスの歴史】

私たちが今いますのが明治大学生田キャンパス内の中央校舎という建物の6階ですね。これが終戦直後、1947（昭和22）年にGHQが撮影した登戸研究所の写真です。もちろんこの段階では、すでに登戸研究所ではないわけですがけれども。ここ（現在の生田図書館北側の敷地）にあるのが登戸研究所の本部本館と呼ばれているものでして、この本部本館とその西側にある建物（現在の中央校舎の北半分）、この一角は、実は登戸研究所ができる前からこの地にあった建物です。登戸研究所は1937（昭和12）年にこの場所に実験施設が初めてできるのですけれども、それ以前は何もなかったのかというと、そうではなくて、実は1932（昭和7）年からここには日本高等拓植学校というブラジル移民、特にブラジルのアマゾン地方に移民をする移民養成のための学校があったのです。アマゾンへの移民ってどういうことをやるのかというと、ジュート栽培、ジュートっていうのは麻です。麻を栽培する。何で麻を栽培するのかというと、一番の需要はコーヒー袋ですね。コーヒーを入れるための袋、これを作るために、麻の繊維を編んで袋を作ります。そのジュートを栽培する移民というのがあったんですね。普通、ブラジ

ル移民というとコーヒー農園に移民する人をイメージしますが、そのコーヒーを入れる袋を作る移民というのがあったということなのです。1936（昭和11）年、二・二六事件があった年に撮られた航空写真にはちょっと不鮮明ですが、建物が写っています（拓植学校本館・寄宿舎）。私たちはまさにこの寄宿舎跡上空に今いるわけですし、隣に本館が写っています。他の建物はみんな登戸研究所になってから新たに建てられた建物です。更にこの後、本館・寄宿舎の北側にも、それから南側の方にも施設が増設されていくんですね。今、資料館になっている建物はここ（西南部）に写っています。現資料館の東側の大きな建物は偽札の印刷工場なんですね。偽札については後でまたお話をしますが、偽札の製造というのはずっとここで行われているのです。疎開をせず、一部機能を福井県の方に移しますが、基本的には、偽札の印刷というのは終戦までずっとこの生田の地で行われておりました。



【写真1・日本高等拓植学校（ポストカード）1932（昭和7）年頃撮影】（上塚芳郎氏提供）

これは高等拓植学校時代の写真、南の方から北の方に向けて撮った写真でして、右側に高等拓植学校の本館、ちょっとお洒落な建物ですね。左側に寄宿舎がありました。この台地上がすべて農園だったんですね。そういう場所だったのです。この写真はどうも、お土産にするための絵はがきでして、ここにポルトガル語で説明が書いてあります。1932（昭和7）年にできた当時の写真ですね。

今、お話しましたように1932年、昭和7年から昭和12年まではこの日本高等拓植学校があったのですが、1937年にその土地を陸軍が買い取りました。と言いますのは、ブラジル移民をする人がなくなっちゃうんですね。もう当時、時代は満洲移民の時代になって、満洲へ満洲へと移民が送られていく時代になりました。ですから、ブラジルに移民をするという人がいなくなりまして、結局この日本高等拓植学校は閉鎖されることになったのです。その土地に注目したのは日本陸軍でして、そこをすべて買い取ってここに登戸研究所を作りました。1945年までは、ここに登戸研究所があったわけです。1945年から1950年までは、実はこの登戸研究所の建物を利用して、慶應義塾大学、それから北里研究所、巴川製紙所、こういうところがこの土地を利用していました。慶應義塾大学は、日吉のキャンパスがもともと連合艦隊の司令部として使われていたものですから、GHQに接収されてしまって使えなくなってしまうのです。ですから日吉のキャンパスを一時こちらに移転させて、この生田に「登戸仮校舎」というかた

ちで5年ほど慶應大学がここを使っています。ですから慶應大学がこの登戸研究所の建物の中を改装して、教室だとかそういうものにしていたようです。あと、登戸研究所時代に偽札を製造するための製紙工場をここに作りました。それを利用したのが巴川製紙所で、巴川製紙所はもともと偽札製造で技術を陸軍に提供していたのです。そういう関係もあります。戦後5年ばかりこういう時期がありました。一旦陸軍がこの土地を全部、買い上げておりますので国有地なんですね。国有地を借りるかたちで、このようなものがあつたんです。そしてその後、1950年に明治大学がこの土地を取得いたしました。当時比較的低いお金で国有地を払い下げることが行われておりますので、戦後つくられた大学のキャンパスというのは大体もとを辿れば軍用地であつたり、軍需工場であつたりというのが多い。この登戸もまさにその通りです。登戸研究所の敷地は、11万坪ほどありました。東京ドーム9個分という非常に広い土地です。現在の生田キャンパスが5万坪くらいですから、現在でも結構広いキャンパスですが、これの倍以上の敷地が登戸研究所時代はあつたということです。明治大学が取得した段階でも、そのなかに建物89棟がありました。明治大学が取得していない部分もありますので、登戸研究所の建物というのは少なくとも100棟以上あつたのです。そのうち、明治大学が取得しただけでも89棟、コンクリート製が7棟ありました。これらは全て平屋建てです。二階建ての建物というのは無いですね。このコンクリート製の建物1棟が、現在資料館になっている建物です。1951年から農学部のキャンパスになりました。しばらくここは農学部単独のキャンパスだったのですけれども、1964年、前の東京オリンピックがあつた年に、聖橋校舎と言つてもともと御茶ノ水にあつた工学部がこちらに移転をしてくまして、現在でも中央校舎を挟んで北側、小田急線の方の側は理工学部が使っている（後に工学部が理工学部という名前に変わりました）。中央校舎よりも南側を農学部が使つておまして、実はごく一時期、1950年代に経営学部もここにあつたことがあるのです。これは本当にごく一時期、3年ばかりですけれども、ここで学んだ経営学部の人があります。これは極めて貴重な存在なんですけれども実際そういう方が資料館にいらつしたこともあります。なかなか今では知られていない事実なんですけど。

1960年代に撮られた明治大学生田キャンパスの写真には、ヒマラヤ杉が写っています。図書館の前の空間に、このヒマラヤ杉が今でもあります。この建物というのがもともと日本高等拓植学校の講堂であつた建物なんですね。登戸研究所では本部本館として使われていたこの建物が、戦後は明治大学の図書館になつたのです。ですから全く同じ建物が、移民養成学校の本館、登戸研究所という軍事施設の本部、そして戦後は、大学の図書館とですね、全く機能を変えずと使われ続けて、この建物は1990年まで残っていました。わりと最近まであつたんですね。この建物はもとをただせば拓植学校時代の本館です。その段階では凄く綺麗な建物ですけれども、長年使われている内にだんだん朽ち果てていってしまい、今では解体されて、もうなくなつてしまいました。

I 敗戦にともなう証拠隠滅作業

1 証拠隠滅作業

少しこのキャンパスの紹介をさせていただきましたけれども、昭和20（1945）年8月15日、玉音放送よりも前に実は午前中に陸軍省の軍事課というところ、これはまさに陸軍省の一番中枢部分ですが、ここから命令が出まして、「登戸」、それから「ふ号」関係、「ふ号」関係というのは風船爆弾のことですね、これらは優先的に証拠を隠滅せよという指令が出ます。これなぜこんな命令が出たかと言いますと、ポツダム宣言を8月14日に日本は受諾をするわけですが、そのポツダム宣言のなかの項目に戦争犯罪人の処罰というのが入っています。ですからポツダム宣言を受諾して日本は降伏をしたわけですが、そうすると連合国が自動的に戦争犯罪人の処罰を行うぞということなんです。ですから日本側としては何を考えたかという、戦争犯罪人とは何かというのは不明確なので、それならば戦争に関する資料は一切合財消してしまおうというのが当時の軍の考え方でした。ポツダム宣言受諾が8月14日ですが、米軍が上陸してくるのはいつかと言いますと、一番初めに上陸してきた部隊は8月28日なんです。これは上陸とは言っても、厚木飛行場にまず第一陣、先遣隊がやってきた。8月30日にマッカーサーも厚木にやってくるわけですね。ですから日本は降伏したけれども占領されていないという時期が2週間あります。この2週間に徹底的な証拠の隠滅、具体的には書類の焼却が行なわれます。登戸関係はまさに真っ先に証拠書類の焼却、それから器物の破壊ということが行われまして、疎開先の伊那でも書類の焼却、それから器物の破壊、作った武器なんかの破壊が行なわれます。ただ建物そのものはみんな残るのです。特にこの登戸研究所は空襲（爆撃）を受けていませんので、建物は綺麗に残っているんです。ですからなかにあった書類だとかそういう証拠物件は綺麗さっぱりなくなってしまうんですけれども、外側の建物はそのまま残りました。実はこれは登戸研究所だけではなくて、全国の軍事施設で行われた共通の作業です。私は歴史の研究者ですから、一番ここは残念に思うのですけれども、膨大な資料がここで失われてしまうんですね。戦争に関係した一次資料、まさにリアルタイムで作成された資料というのが、これは数量で表すことはできませんけれども、しかし少なくともおそらくは90%以上の文書資料がここで焼却処分されてしまう。実は戦後残された資料というのは戦後復元された資料が多いです。元の、それを起案したような人たちが思い出してもう一回復元したような資料が多いのです。本当の原資料というのは、徹底的に処分されてしまいました。これはなぜかという、当時日本軍の命令系統は全部生きているわけですね。日本国内は全く占領されていないわけですから、軍中央から命令を出せば、全部それが実行されます。それを邪魔するものはだれもないわけです。全国の軍事施設、これは当時、敗戦時に軍隊にいた人の共通体験で、大体大きな穴を掘って、そこで書類を焼いたという思い出が語られています。伊那でもそうです。重要

な戦争関係資料がここで消滅してしまいます。2週間あれば相当のことが出来るわけですよね。本来この2週間というのは、別にこのために2週間空けたわけではなくて、米軍が上陸する準備がまだ出来ていなかったんですね。ですから、準備を整えて上陸してくるまでの2週間の間に軍と政府はいろいろと都合の悪い戦争関係の資料を徹底的に処分することができた。ですから、東京裁判というのは証拠物件がない裁判なのです。そのために、証言に頼らざるを得ないということで延々と続いてしまうのです。ドイツに対するニュルンベルク軍事裁判は、これは証拠物件を連合軍が押さえたものですから1年で終わっているのです。ところが東京裁判というのは、1946年から始まって、46、47、48と足かけ3年も続く長い裁判になってしまうのは、文書資料がなくて、結局証言をもとにした裁判にならざるを得なかったということがあります。その大もとをつくったのは、この敗戦から2週間の大々的な証拠の隠滅作業であったということですね。今から考えると処分しなくてもいいようなものまで徹底的に処分をしている。例えば役所、村役場とか町の役場にあった兵事関係書類、つまり、今この町から誰が出征しているとか、そういう資料も徹底的に処分してしまったんですね。ですから今ほとんど残っていません。たまたま偶然残ったものはあるのですけれども、大半のものは、内務省の命令によって徹底的に焼いてしまって証拠が残っていない。それは後から考えると非常に無駄なことをしたという感じもします。そこまでやらなくてもよかったです。実際に伊那地方に行きますと、これは登戸研究所が移転していた中沢国民学校、現在中沢小学校ですけれども、その校庭を掘り出しますと、ちょっとわかりにくいですが、ガラス交じりの瓦礫が出てまいりました。これは最近になって掘り出されたものですが、焼け焦げた土とか木の燃えカスみたいなものですね、いろんなものが雑多に入っています。元の状態では何が何だか分からないものですから、資料館でも少しこれを分類して、それを展示しております。こういうことが全国で行われた。特に登戸研究所は小学校とか、お寺、神社、そういうところに分工場を作って移転しておりましたので、それらで証拠隠滅作業が行われたということなのです。

2 証拠隠滅にともなう事故・不始末

この証拠の隠滅作業にともなって、事故も起きます。わりとよくあるのは作った兵器を破壊したときの爆発で何か飛んできてけがをしてしまうということです。企画展で展示していますので、まだご覧になっていらっしゃる方は是非見ていただきたいのですが、証拠隠滅を免れたものが例外的にあるのです。証拠隠滅を免れたというか、本来だったら完全に隠滅されてしまうはずだったけれども、偶然残ってしまったものというのがあるのです。これは中沢第三分工場、福岡社という神社に残されていたプラスチック製の棒のようなもの、この中に燃焼物が詰められておまして、火を付けて放火をする道具として使おうとしたもののようなのですけれども、これが残っていたのです。今、企画展で展示しておりますけれども、ちょうど1メー

トルぐらい、直径1.5センチぐらいの棒です。樹脂製と言いましょか、プラスチック製の棒みたいなものですが、真ん中に穴が空いておりまして、つまり大きな鉛筆みたいなものを想像していただければいいんですが、真ん中の鉛筆の芯の部分に燃焼物が詰められていて、マッチとかライターで火を付けると、20センチくらいポーッと火が出ます。これを福岡社で、当時動員されて働いていた地元の方がどういうわけか持って帰った。どういうわけかよくわかりません。普通こういうものは処分されてしまうはずですけども、処分される前に10本くらい持ち帰ったようです。持ち帰っても、実用的なものでもありませんから、そのまま捨てられてしまうのが普通ですけども、これを持って帰った方は、これが非常に便利なものだということに気が付いてずっと戦後使っていたのです。使っていたというのは、これ火が出るものですから、蜂の巣を焼くのにちょうどいいということです。長い棒で先から火が15センチから20センチくらいポーッと出るんですよ。確かに蜂の巣を焼く便利な道具になるわけで、これをずっと70年間使ってきた。ですからどんどんなくなってしまった。簡単に火が付いて簡単に消せるんですね。蜂の巣を焼いては消す、焼いては消すってずーっと使ってきて、どんどんなくなる、だんだん溶けてなくなってきますので、10本ぐらいあったのが残り3本ぐらいになった段階で、ちょうど私たちが調査に訪れたのです。その方にそれを見せてもらうという予定で行ったのではなかったのですが、こんなものがあるよと、地元ですと登戸研究所のことを調べていらっしゃる先生から紹介をさせていただいて、その方のお宅に行ったら、こんなものがあるよ、じゃあちょっと今から火を付けてみようとかって言われたんですけども、危ないので、ちょっとそれはやめましょうということにしたのです。このことが、地元の新聞に載りまして、NHKがそれを聞いてこの方のところに来て、その残りの1本に火を付けちゃったんです。その方も実際に蜂の巣を焼いて見せた。そうしたら確かによく燃えると言いましょか、非常に役に立つと。NHKはその成分分析もしてくれました。私たちはよっぽど特殊な薬品が詰められているのではないかなと思ったのですが、ほとんど松脂のような植物性のものなのだそうです。70年経ってそれがすぐに使えるというところがなかなか凄いですよね。凄く単純な、簡便な兵器です。でも、非常に役に立ったものですが、その方が大切に保管していたということではないのです。何かガレージの片隅に普通に置いていたという感じなのですが、そういう置き方していても使える状態だった。これは例外というか、例外中の例外です。秘密戦のために当時作った兵器の一部が、今、現物が残っているなんていうことはちょっと考えられないことですね。たまたまこれは違ったかたちで使われていたので、残されたけれども、こういう事例が他に沢山あるとは思えません。もっと高度な兵器ですと、当然残らずに処分されてしまったということが言えると思いますし、もっと危険なもの、例えば毒ガスのようなものでしたら危ないので、まず真っ先に処分されてしまうわけです。ですから、これは証拠隠滅の例外中の例外ということですね。

もう一つ、証拠隠滅にともなう事故がありました。伊那では毒入りチョコレート誤食事件と

というのが起きているのです。伊那村分工場、これは当時の伊那村国民学校、現在、東伊那小学校というところですけど、ここもやはり工場になっていた。そこで毒入りチョコレートというものを作っていた。これも謀略の兵器です。つまり、もし本土決戦になったら毒入りチョコレートを米軍のいるところに撒いて、間違っって米兵がそれを食べると、お腹が痛くなるか死んでしまうかわかりませんが、そういうことを狙って作ったものです。ところがそれをうっかり事情がわからない人が子どもに与えてしまったのです。すぐに処置をして犠牲者は出なかったようですが、毒入りチョコレートを作っていたという証言も残っています。明らかにこの伊那村分工場では本土決戦用の攪乱兵器として、秘密戦用の毒入りチョコレートを製造していたということですね。当時の伊那村国民学校の学校日誌には、1945年8月18日に「登戸学徒有毒チョコレート誤食…事前処置完了」と書いてある。「事前処置」と書いてありますが、おそらく「事後処置」でしょうね。ですから、多分犠牲者は出なかったと思いますけども、こんなこともあった。普通の学校じゃ有り得ないことですけれども、この学校が登戸の分工場として使われていたためにこのようなことが起きたわけです。実は他の軍事施設でもわりとあるのはニトログリセリンの誤食です。ニトログリセリンというのは甘いんですね。甘くて、それだけ舐めると結構おいしいようで、残されていたニトログリセリンをなめちゃった、というようなもの。ニトログリセリンというのは要するにダイナマイトの原料となっているものですから、それが爆発した事故も、戦後、結構起きます。伊那では毒入りチョコレートですけれども、全国の軍事施設でもこのような事件も起きている。あるいは不発弾の爆発とか、それから処理が不十分で、例えば毒ガスの薬液が浸み出してきただとか、そういう事故が起きております。実は、現在でも毒ガス関係というのは日本国内、あるいは特に中国ですけれども、当時遺棄した毒ガス弾の毒ガス液、ガスとはいっても元は液体で、それが漏れ出てきて、今でも事故が起きています。

もう一つ、登戸、この生田では、偽札の処理が行われました。先ほど申しましたように8月15日までずっと偽札を印刷しました。ですから大量の偽札がこの登戸に残されていました。それを処分するわけです。イメージは掴めるとは思いますが、札束になったようなものをいきなり焼いても、なかなか燃えないですね。焼くけれども、燃え残りが出てしまうわけですね。燃え残りは捨ててしまおうということで、最初は多摩川に捨てに行きたらしい。しかし、気がついてみたら明らかにお札だというのがいっぱい川岸に漂着してしまいました。蛇籠というものが、石を詰めて堤防にありますね。それに燃え残りの偽札がいっぱい絡み付いているという状態です。これはいかん、ということで、またそれを集めて、今度は海に捨てに行きたそうです。処分もなかなか大変です。この登戸でも証拠隠滅は行われておまして、器物を破壊するためではないかと思うのですが、わざわざ戦車まで持ってきている。警備のためという関係もあるかもしれませんが、別に戦車で守らなきゃいけないような事態ではないわけですし、恐

らく踏み潰す、何かを破壊するというようなことに使ったのではないか。「戦車が来てた」っていう証言は結構あります。

それから不思議なのは、偽札製造のための印刷機です。これはかなり何台もあったはずですが。しかも登戸研究所にある印刷機は非常に高価な印刷機です。本当のお札を印刷するための印刷機と同じものを使っていたわけですから。大元はドイツから輸入した立派な機械を日本国内でコピーしていくつか作って、それを何台もこの登戸研究所に入れていた。何で地方に移転しなかったかという、印刷機を持っていく、移動する、ということができなかったからです。非常に貴重なものですから、香港から運んできたものは破壊して埋めたというような証言もあるんですけども、多くは払い下げられたのではないかと思います。ただこれは、町の印刷屋さんが使うにはあまりにも大型の精巧な機械ですから、それなりの大きな会社でないと使えない。たくさん印刷機はあったはずですけども、いつの間にかみんななくなってしまう。ですから、これはよくわからないところです。

それから残った製紙材料がたくさんありました。紙の原料ですね。これは偽札関係ですから、パルプもあるでしょうし、あるいはここは風船爆弾の研究もやっていたので和紙もあったと思いますし、偽札の切れ端も残っていたでしょう。これは偽札製造の過程で断裁した切れ端がいっぱい出ますから。お札であるというのがわからない部分というのが結構ありますので、そういうものは、当時こういう原料が不足していましたので、地元の業者・山田紙業、私と関係ないですけども、に払い下げられた。どうも登戸関係には山田さんが多いんですね。第二科長の山田桜さんという人もいますし、第一科で怪力光線をやっていた山田愿蔵さんとかですね、山田一族が結構関係しているんですけども、ここでも山田紙業が出てきます。交通銀行六連偽札は完成品ではなくて、資料館でも展示している半完成品です。これを断裁、六分割してナンバーを打って、それで完成ですね。これはたまたま戦後、偶然出てきた六連の偽札です。こういうものを大量に作っていたはずですが。ですから、登戸では、処理に困るほど大量に偽札が集積されていたということです。終戦近くになりますと、作った偽札をなかなか中国に輸送できなくなってしまう。もともとは、この登戸で造った偽札は中野学校を出た人が警備をして、鉄道で北九州まで運んで、そこから輸送船で上海に送る、朝鮮半島と北京経由で送るということをやっていたのですが、それができなくなってしまう。ですから、どんどん造った偽札がたま一方だったので、膨大な偽札がこの登戸研究所には残っていたと思われま。

このように、さまざまな形で証拠隠滅作業が行われました。私たちも今回いろいろと調査をいたしましたけれども、まだ、ごく一部を明らかにしたというだけです。まだまだ明らかにしなければいけないところがある。例えば伊那地方はさっきの小学校の学校日誌が残っていたので、どんなことが起こったのかというのはある程度わかりますけれども、研究部門が移転していた安曇野ではどうだったのか。これは当時作られたパラボナアンテナを湖に沈めたとか、そ

ういう証言と言いましょか、回想はあるのですけれども、なかなかそれは確認ができないところで、これは今後の課題として残っております。それから、登戸研究所、他にも移転した場所、分散疎開した場所がありますので、そういう所もきちんと戦後どうなったのかということを見ていかなければいけないと思います。

Ⅱ 登戸研究所の所員たちの戦後

1 所員・雇員たちの復員

次に、登戸研究所の所員たちの戦後ということなんです。「所員・雇員たちの復員」と書きましたが、所員というのは登戸研究所の正式なメンバー、例えば技術将校・技師・技手など、まさに登戸研究所には「所員何名」というかたちで、軍に認められた人数がいます。こういう正式メンバーを「所員」といいます。それとは別にこの研究所の所長の裁量で雇える人たちがいます。定員外の職員ですけれども、それが「雇員」あるいは「工員」ですね。これらの人々を予算内で雇うことができる。これは特に定員があるわけではなくて、必要ならばたくさん雇うし、不要ならば減らす、ということが出来る人たちです。この証拠隠滅作業が終わった後、8月のうちに伊那では解散式が行われるのですが、残務整理者以外の所員、それから雇員、工員の人たちは、当然戦争が終わりましたので、復員することになるわけです。米軍による登戸研究所施設の接収は10月ぐらいから、これは長野でも行われます。実際にGHQが来て調査をして、建物を接収しました。建物を接収しただけではなくて、GHQの参謀2部という情報部で、主な所員は尋問を受けます。大体、技術将校、技師、技手、つまり幹部職員です。この人たちに限られますけれども、尋問が行われます。登戸研究所は第二科で人体実験をやっていますので、厳密に言うと、人体実験には捕虜を使っていますから、当時のBC級戦犯ということ、実際はこの場所（登戸）で人体実験をやったのではなくて、中国（南京）でやっているわけですが、当然そういう容疑というのはあるわけです。しかし、情報提供と引き換えに免責措置がとられたと言われておりまして、これは731〔部隊〕でも同じで、この登戸研究所からは戦犯として起訴された人は全くおりません。

当時の登戸研究所関係者の置かれた立場はどうであったのかといいますと、研究所の所員（技術将校、技師、技手）の人たちは、1946年1月にGHQの「公職追放令」というのが出ましたので、公職には就けません。公職というのは公務員・議員・教員、マスコミ関係も「公職」と規定されておりまして、こういうところに就けないわけです。ですから、自分で仕事を始めるか、あるいは企業に勤めるか、あるいは家業のある人は家業に復帰するか、あるいは帰農、ふるさとに帰って農業をやるか、ということになるわけです。雇員や工員は、退職一時金が支給されて、解雇・帰郷、ということになります。実際、この登戸周辺出身で採用された人も多い

ので、ここにまた戻ってくる、という人も多いわけですね。

2 起業した事例（伴繁雄氏の場合）

一つ起業した事例として、伴繁雄さんの事例を挙げます。伊那村分工場、先ほどの毒入りチョコレートがあったところですが、伴繁雄さんはもともと第二科の第一班の班長で、終戦時技術少佐でした。この人は地元の長野に残って、元所員たちと「上伊那農村工業研究所」を設立しまして、登戸研究所の技術と地元の資源を活かした製品の開発を行います。例えば、パーマメントキャンドル。当時、電力不足でよく停電が起きましたので、パラフィンを補充することでランプのように使える蠟燭ということです。こういうものを作って売っていたということです。それからベントナイトクレンザーという、ベントナイトというのは、伊那地方でとれる粒子の細かい白土でして、これを使ってクレンザーを作ったというんですね。その包装箱と中身が残されております。戦後の物不足、それから地元で採れるものを利用してこういう製品を作っていたということです。伴さんは、終戦後しばらくは、元の所員の人たちと研究所時代の技術を使ってそれなりに仕事をして、物を売って、生活を立てようとしていたようです。

3 関連企業に就職した事例

また関連企業に就職した事例は多いです。北安曇郡の池田町に移転していた「日本高周波」という会社、これはもともと登戸研究所と非常に結びつきの強い会社です。登戸研究所の第一科長、第一科というのは「く号」兵器、電波兵器とか風船爆弾を開発したところですが、その科長であった草場季喜元陸軍少将をはじめとする人たちが役員として就職をして、電波兵器技術の平和利用、もちろん戦後ですから、当然平和利用しかできないわけで、かつて研究した技術を活かしていろいろなものを製品化したということです。電波とはいっても、高周波を使って木材を乾燥させる、接着させる、それからあるいは木材を曲げるというようなこと、あるいは金属の焼き入れとか、塩化ビニールの接着とか、高周波を使って、何か材料を加工することに研究成果を活かしたということです。登戸研究所はもともと1937（昭和12）年にここに実験施設ができた時はまさに電波兵器の実験場としてできたわけですね。もともと「登戸実験場」と言っていたのです。最初の実験は電波兵器の実験だった。ですからもともとこの登戸は電波関係、電波と言ってもすごく幅は広くていろいろなものにも使えるわけですが、特に超短波、それを使った兵器開発をやっておりましたので、それを応用したことをまた戦後、始めたということになります。関連企業への就職という点では、この登戸研究所の所長であった篠田鐮という人、終戦時陸軍中将ですが、この人は巴川製紙所に迎えられまして、後には巴川製紙所の社長にもなりました。

4 登戸研究所関係の軍事技術のその後

登戸研究所関係の軍事技術のその後を少し見ておきたいと思います。登戸研究所が最も力を入れていた「く号」兵器、つまり「怪力光線」,「怪力電波」は、別にこれが元になったというわけではなくて、同じ原理で電子レンジとか、魚群探知機などにこの技術が応用されていきます。電波、目に見えない力で何かを破壊するというような、こういう発想としてはレーザー兵器として現在継承され、実用化されています。こういうものがどうして有効なのかというと、例えば大砲などは撃った反動が起きます。これは地上だったら別に構わないのですが、例えば飛行機から大砲を撃つことはできないわけですし、宇宙空間ですと、反動があると、例えば人工衛星に大砲を積んだとすると撃ったその反動で人工衛星の方が飛んで行ってしまふということが起きるわけです。ところが電波とかあるいはレーザーですと、全く何の反動もなく照射できますから、兵器として非常に都合がいいということです。ですから、このレーザー兵器というのは、実は地上ではほとんど見当たらないものなので私たち気が付きませんが、宇宙空間にはこのレーザー兵器は配備されているのです。つまり人工衛星が人工衛星を攻撃する、つまり核戦争になった時にミサイルを目標に誘導するのは人工衛星です。あるいは相手の目標を確認するのは、まさに今私たちは車でもナビを使っているわけですが、あれは人工衛星の技術がなければ成り立たないわけです。もしその人工衛星が破壊されてしまったら、そういうGPSも使えないし、当然ミサイルの誘導も、通信もできない、ということになります。そのような戦争が起きた時にはまず相手方の人工衛星を徹底的に破壊するということが考えられています。そうすると、宇宙空間にさっきも言いましたようにミサイルとか大砲だとかそういうものを配備できませんから、このレーザー兵器を配備して全く反動が起かない兵器として使われているということですね。実は恐ろしいことに、兵器開発というのは、何か可能性があるるとどんどん進んで行ってしまふということです。

それからもう一つ、第一科でやった風船爆弾の和紙の技術、和紙の機械漉きの技術のことで、和紙というのは洋紙と同じく紙ですが、実はちょっと性格が違います。紙の繊維の長さが和紙は長いために簡単に機械で漉くということができません。洋紙はパルプで繊維が短いのですから、これは容易に機械で漉くことができます。和紙は、手漉き和紙を想像していただけるといいのですが、普通に網の上に水をサーッと流しただけでは、上手く均等に広がらないのです。それは繊維が長くて、絡まり合ってしまうからです。ですから、揺らすような、よく手漉き和紙ですとすけた簀笥を職人さんが揺らしていますよね。あの揺らす技術がないと、上手く漉けないのです。ところが、風船爆弾を開発する時に、何とか大量に同じ質の和紙ができないかということで、機械漉きの技術を開発しました。もともと、これはまだ試作段階ぐらいで、大量生産はされませんでした。しかし、戦後、懸垂短網自動抄紙機、懸垂というのは手漉き和紙の揺らす動作ですが、これを機械で行うという、手漉き和紙と機械漉きの技術を上手く混合さ

せた和紙の機械製紙技術ができるのです。ですから今では、和紙の活用範囲が非常に広まりました。例えば手漉き和紙ですとどうしても大きさが限られてしまいます。つまり、和紙を濾過する簀桁よりも大きなものはできないわけですが、機械で、ロール状にどんどん巻いていきますと、壁紙のような非常に大きなものまでできる。今ではこうしたことは実用化されているのです。ところが非常に皮肉なことに、自動抄紙機が普及したために各地の手漉き和紙が苦しくなってしまうということが起きました。しかし、和紙の自動抄紙、自動で紙を漉くという技術の元はまさにこの戦争のときに作られたということなんです。

それから登戸研究所でも関係しておりました、これは第一回目の講演会でもお話ししたものですけれども、「マルケ」と「ね号」、これらは別々のものでした。「ね号」という兵器が発展して「マルケ」になるのです。「ね号」というのは熱線、赤外線のことです。熱が出ているところからは赤外線が出るわけです。熱が出ているところに向けて自動的に大砲や機関銃を向けるという技術、これがもともと「ね号」というものです。これを登戸研究所でも研究しているのです。これが本土決戦用兵器「マルケ」に変化する。「マルケ」の「ケ」は決戦の「ケ」です。ですから決戦兵器として非常に期待されたもので、爆弾の頭に赤外線センサーが付いて、熱線、赤外線を発しているところめがけて爆弾が自動的に落ちていく。爆弾の羽のところ^{かじ}に舵が付いていて、熱を発しているところに向けて爆弾が自動的に落ちていくという装置です。これは登戸だけではなくて陸軍の総力をあげて作っていた兵器ですが、まさに誘導式爆弾ですね。実は「ね号」も「マルケ」も今は完全に実用化されているのです。「ね号」、つまり銃砲の自動照準装置、赤外線を発しているところに自動的に大砲を向ける、あるいは機関銃を向けるというような技術です。海上自衛隊の護衛艦や海上保安庁の巡視船なんかに積んでいる機関砲の類はみんなこの装置を積んでいます。もちろん人力で照準を付けることもできますけれども、自動的に相手のエンジンめがけて発射するというものです。それから「マルケ」の方はミサイルの誘導技術として実用化をされています。実際に熱を発している、例えば飛行機は当然エンジンから熱を出しているわけです。それをめがけてミサイルが追いかけてくという技術です。ですから、こう見ますと登戸研究所で考えていたことは、もちろん平和利用として使われている部分もありますけれども、やはりそれを使ってさらに高度な兵器を作ろうというところに結びついているということです。当時の日本の技術ではできなかったわけですが、今の技術水準になるとこういうことが実現してしまうということです。

それから、第三科でやっていた偽札とか偽パスポートですね。これはまさに戦後、米軍の秘密戦遂行の道具として活用されます。これは登戸の技術が非常に精巧であったということと同時に陸軍はもともと対ソ戦争ということをずっと考えていてソ連情報を集めていました。例えばソ連のパスポートの紙質あるいはパスポートを綴じている針金の材質などをずっと研究していたわけです。ソ連情報プラスそれを製造する技術、両方持っていたのが登戸研究所第三科で、

この第三科の科長は山本憲蔵さんという人で、この人はもともとは対ソ謀略戦、ソ連に対する情報活動をやっていた。そういうこともあって戦後にこれらはみんな繋がってまいります。

5 米軍GPSO（政府印刷補給所）での活動

今回の第二期の企画展のひとつの目玉でもあるのですけれども、米軍のGPSOという組織、GPSOというのは、Government Printing Supplies Office、直訳すれば政府印刷補給所みたいなことになります。なんてことない名前が付いているのですけれども、「補給」しているものは何なのかというと、別に印刷物の消耗品を「補給」しているのではなくて、偽札とか偽パスポートとか、こういうものを「補給」していたところです。証言によりますと、1950年春、まだ朝鮮戦争が起きる前に第三科長山本憲蔵さん、この人はまさに登戸での偽札造りの責任者ですが、この人から第三科の科員数名に連絡がいきます。米軍の横須賀基地のなかにあるGPSOで働かないかと。このGPSOというのは米軍の野戦研究班というものの下部機関にあたるもので、当時は対共産圏秘密戦のための資材を「補給」する組織として作られていました。この山本憲蔵さんをチーフにして、第三科の科員を中心にして、10名ほどが集められまして、横須賀基地の中でこれを行うということです。今回、証言をたよりにGPSOがどのあたりにあったのかということ調べてみました。これは横須賀基地の航空写真です。



【写真2・横須賀基地航空写真】



【写真3・GPSOが使用していた建物】
(資料館撮影)

これは秘密に手に入れたものではなくて普通に手に入るものです。登戸研究所資料館はそういう諜報活動をやっているところではありません。これは横須賀基地ですね。横須賀軍港に米軍の航空母艦が停泊しているのがわかります。その上にあるのが空母用のドックです。もともとは日本海軍が大和型戦艦の三番艦「信濃」を造るために作ったドックなんですね。このドックは現在でもアメリカの航空母艦の修理をするため使われている。つまりこのような大型ドックは、極東にはここしかない。米軍が横須賀を手放さないのは、このドックの役割が大きい。帝国海軍の遺産ですけれども、このように、軍事施設がたくさん集中しているこの横須賀基地のなかのこの部分にGPSOが最初あったという証言が得られまして、今でもその建物が残っていました。別に登戸研究所資料館の学芸員が密かに潜入して撮影してきたわけではなくて、ちゃんと許可を得てこの基地内で撮ってきた写真です。こういう建物が今でも残っていて、二階でやっていたそうですけれども、まさに戦後の秘密戦の舞台のひとつがわかってきた。後に別の所に移転をしたようです。何で移転するかといいますと、1952年6月、既に1950年から朝鮮戦争が始まっているわけで、山本憲蔵さんは新拠点設置のためにサンフランシスコに行くということになりました。そこでこの横須賀に駐在する後任のチーフとして、伴繁雄さんを選ぶのです。伴さんはもともと偽札造りを中心にやっていたわけではないのですが、秘密インクだとか、

写真とか、まさにスパイ活動のいろんな道具を開発していた人なので、伊那で会社を立ち上げてやっていた伴さんと呼ぶわけですね。1952年4月より伴さんは横須賀に行って契約期間10年ということでGPSOで働くことになりました。その頃、極東情勢が非常に緊迫していて、実際に朝鮮半島で戦争が行われていますし、その前1949年には中華人民共和国ができていたりしているわけで、まさにGPSOの機能も強化されていました。30人ほどの規模になっていたそうです。登戸の第二科、第三科の関係者を中心に働いていた人がここにいたということです。1961年までGPSOは横須賀にありまして、1961年に全部サンフランシスコに移転するまでは、2年交替で横須賀とサンフランシスコを交互に勤務をしていたということです。何をやってたのかというと、中国や北朝鮮やソ連のパスポート、証明書類の偽造です。まさにスパイ活動の最前線がここにあったということです。実はこの後1961年にGPSOがサンフランシスコに移りますと、1961年以降はそろそろベトナム戦争が始まる頃で、まだ大々的に米軍が介入する前ですけども、ベトナムの偽造紙幣の製造も行われたということです。ですから戦後も1960年代前半くらいまでこれに関わっていた旧登戸関係者がいたということです。まさに登戸研究所の秘密戦と戦後のアメリカの秘密戦がこういう接点を持っていたということです。今までも少しはわかっていたところはありますけれども、具体的に「ここでやってた」ということが明らかになってまいりました。

おわりに

戦争、あるいは秘密戦というものの記憶、これは放っておくと必ずなくなってしまう記憶です。誰かが残そうと意識をして、伝えていこうと思わないと自然に残るものではないですね。関係者の方は普通には話さないことです。ですから、こういうことをきちんと残していく、これは登戸研究所資料館の一つの役割だと思っていますけれども、戦後との連続性ということもちゃんと考えていかなければいけないと。8月15日で歴史が切れてしまうわけではないのです。ずっと同じ人たちが歴史を作っているわけです。それに関係すると、この生田キャンパスの歴史、それから中野ですね。中野のことについて今日は全然とりあげませんでしたけれども、やはり中野キャンパスは中野学校があったわけで、そこで秘密戦に関わった人たちの中には戦後も何らかのかたちでそれに関わった人もいます。そういったキャンパスの歴史を通じて戦争を語り継ぐということです。やはり戦後70年という節目で、いろいろなかたちで戦争の記憶というのを語り継いでいかなければならない時期に来ておりまして、私たち平和教育登戸研究所資料館もその一端を担えればと思っております。この生田キャンパスに残っている戦争遺跡をより多くの方に見ていただいて戦争の記憶を引き継ぐ舞台としていければと考えております。資料館そのものも登戸研究所の建物ですので、戦争遺跡そのものであるということです。企

画展，3月26日までやっておりますので，ぜひまだご覧になっていらっしゃる方，あるいは前半は見たけれど後半は見てない，という方はぜひお立ち寄りいただければと思います。

質疑応答

質問者1：貴重なお話ありがとうございました。ちょうど私の年代は1941（昭和16）年に国民学校1年生に入りました。そして12月に太平洋戦争が始まった。私の言うなればガキの時代です。本当にガキ〔餓鬼〕だったんです。食うものも何もなくて。そういう時代だったものですから。先生のお話で、「空白の2週間」というお話がありました。それを僕は今お話をうかがって記憶をたどってみますと，当時の国民学校には先生方，警察官，それから当時は警護官〔？〕といった人たちが来て，校庭に大きな大きな穴をあけた。それを子供心に見ていましたら，兵器庫っていう僕の年代の人ならわかるんですが，学校に兵器が入っていたんですね。我々はそれは何があるかっていうのはわからないけど兵器だったということはわかる。その兵器と，学校の書類を大きな穴にぼんぼん埋めてたという記憶があります。ですからそういう意味で，非常に今日の先生のお話は私のガキの頃の経験と重なりました。それから今一つ大きな問題として，中国で731部隊の石井中将なんかの責任者が米軍とGHQと，情報の交換ということで免責されたと。まさにこの登戸研究所の責任者もそうだったというふうに先生からうかがって，ああ，歴史っていうのは怖いなあ，我々が目をパッチリ開けてよく見てなきゃいかんなあ，というふうによく感じました。ありがとうございました。

山田：ありがとうございます。もちろん今のようなご意見でも構いませんので，他にございませんでしょうか。

質問者2：アメリカのナショナルアーカイブスで登戸研究所に関する資料ってないんですか。出さないんですか。

山田：アメリカに残っている資料については，今調査をしているところですが，日本軍の軍事技術についてはアメリカは戦中から終戦直後にかけてかなり詳細に調べておまして，「コンプトン・レポート」とか「サンダース・レポート」とかいろいろとレポートを作っております。ただ，登戸研究所だけに焦点をあてたレポートというのは今のところ発見されていません。登戸も関係したであろうというようなものはあるのですが，当然アメリカは資料を集めていろんな聞きとりをやっているわけですから，どこかでまとめているはずですが，ところがそれが，公開されているかどうか，今のところ見つかっていないというのが実情で，風船爆弾関係で，アメリカでも研究している人はいるんです。いるんですけれども，何か特別な資料というのは今のところ出てきてないというのが実状です。ただ，今年度，戦後70年というのをき

かけに、結構マスコミなんかにも戦争のことが取り上げられまして、わりと注目を浴びているんですね。それで、例えばアメリカのスミソニアン博物館であるとか、カナダの軍事博物館などで風船爆弾なんかの現物を持っているようなところでも、この時期になって新しくわかってきたようなこととか、後に行なった聞き取り調査などの成果が少し見られるようになってきていますね。ですから、劇的に資料環境がよくなっているわけではないんですけども、こうしたことを調べようという人たちが増えてくると、資料というのはどこからか発掘されてきたり、新しい証言が出てきたりするというようなことがあって、これはこの資料館の大きな役割だと思っていますので、今後とも、公開資料、それからまだ公開されていない資料の発掘ということを努めていきたいと思います。

質問者3：偽札というのは実際に中国で使われたのかというのが一つと、今見せていただいた写真は交通銀行ということだったんですけど、交通銀行の一種類だけの偽札なのか、最近例えば中国人民銀行とか中国銀行があるんですけども、他の銀行用の偽札は造っていたかどうか。

山田：この偽札は中国で大規模に使われました。非常にたくさん使われてます。昭和20年の日本の国家予算が200億円という時代ですけども、40億円以上の偽札が造られました。しかも、当時、中国は発券銀行、お札を発行している銀行は4つありまして、すべての銀行の紙幣の偽札を登戸研究所は造っています。特に流通量の多い紙幣を中心に偽札を大量に造っておりまして、そういう点ではもともと中国経済を混乱させようと思って偽札を大量生産したんですね。大量に偽札を流通させればインフレが起きるのではないかとか、あるいは偽札が流通しているという風評で中国のお札の信用が落ちるのではないかと、ひいては中国の経済に打撃を与えられるという、そのために偽札を造ったのですが、中国は広いですから少々のお札を撒いてもインフレにはならないということと、それからだんだん偽札の技術が高くなりまして見分けがつかなくなってしまう。偽札が流通していることを中国政府は認識しているのですが、一般には全くそれは気が付かれないで流通してしまったものですから、そういう意味で経済混乱を起こすという目的はうまく造りすぎてしまったために達成できませんでした。ところがうまく造ったために物は買えるんですね。それで物を買って、実は偽札の原料すら中国で偽札使って買っているのです。日本軍にとっては物資調達という点では偽札はぜひぶん役に立ったということなんですね。ただ偽札はなんと言っても非合法です。戦争中といえども相手の国の偽札を造っていいというわけではありませんので、やはり犯罪行為なんですね。そういう点ではこれは公にできることではなかったんですね。ですから登戸研究所のなかでも第三科、偽札関係だけは別扱いで建物の外側を全部板塀で囲んで普通の所員が入れないようになっていました。ただ偽札の件は日本では一般には知られていないことであると同時に、実は中国でもあまり知られてい

ないんですけども、日本軍にとってはひょっとしたら一番役に立ったものなのかもしれません。

〔終〕

〔追記〕

本稿は、2016年1月9日（土）に明治大学生田キャンパス中央校舎6階メディアホールにて開催された第6回企画展記念第二回講演会「NOBORITO 1945 ―8月15日以降の登戸研究所―」の書き起こしに加筆・修正したものです。